

2023年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2024/9/20

団体名	NPO法人 ワークフェア		活動タイトル	不登校の子どもが孤立するのを防ぎ、居場所などにつなげるための家庭訪問				
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景					
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	<p>当団体は、すべての人が人生を自分で動かす力を持っていること、社会において役割を担っていることを信じ、その自己実現のため、共に歩みたいと考えている。</p> <p>とりわけ、子どもが、子ども時代を安心して過ごすことができ、どんな環境で育っても生きる希望を持ち続けられる社会であることを願っている。何らかの困難を抱えている子どもが、それを理由に自分の進む道の選択肢が狭まることなく、子どもを孤立させない社会にしたい。</p> <p>子ども自身が、自分の大切な価値に気づき成長し、またそのような社会を作っていく一人になるはずだと考えている。</p>		<p>外出することのなかった兄弟が、公園で遊んだ日初めてやったキャッチボール</p>					
●団体の社会的役割(ミッション)	<p>2015年より生活困窮世帯の学習支援事業を実施してきたが、経済的な困窮だけではなく、様々な困窮があることがわかった。利用の対象にはならない家庭の子どもたちの中にも、こちらから出向かないと他の誰ともつながりが持てないケースがある。</p> <p>事業費を受けての活動だけではなく、少しでも孤立する子どもがいなくなるよう、他団体と協力して、NPOだからこそできる自主的な活動をやりたいと考えている。</p>			<p>子どもに関わる関係機関交流会 6団体がそれぞれの活動を発表</p> 				
●団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人的資源：不登校で行き場所がなく家にいる子どもの元へ訪問するスタッフが必要。子どもの困っている状況を子どものせいにせずその背景への理解の深いこと、子どもが話しやすい相手であることが重要である。また子どもが希望した時に、学習支援を提供できるスタッフを確保する。</li> <li>●物的資源：自宅を訪問する車と燃料。子どものニーズに応える教材や遊び道具を確保する。</li> <li>●活動資金：この事業を持続していくための費用について、今後も積極的に寄付を募るなど資金集めに努め、当事業を知ってもらうことにも役立てる。</li> <li>●ナレッジ：市と道の委託である学習支援運営の中で、不登校の子どもたちとも関わってきた経験と、学校や公的機関・インフォーマルな団体との顔の見える関係を活動に生かして事業を軌道に乗せる。</li> </ul>							
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)					
<p>不登校で行き場所がなく家で過ごす子どもの孤立を和らげ、次に進む場所へ繋げるために、次の事業を行った。</p> <p>【訪問活動】職員が自宅訪問し、本人の好きなことを一緒にやった。内容は、雑談・工作・ボードゲーム・公園遊び・キャッチボールなど。家から出られない子が、場所を移してゲームをしたり、公園まで行き初めてキャッチボールする例もあった。当法人別事業の子どもの集まりの行事に参加できた子どももいた。作品展に絵を出品した子もいた。</p> <p>【学習支援】学習支援員が訪問し、学校を休んでいる間の遅れを取り戻した。学習支援の結果、学校復帰した例もあった。</p> <p>【保護者相談】子どもと会えず、保護者の思いを聞き、今後のことを一緒に考えた。</p> <p>【フリースクールなど見学】次に進めるタイミングの子どもにフリースクールや通信制高校を紹介・同行した。</p> <p>【基盤強化/関係機関交流会など】市内の子どもに関わる関係機関交流会を実施し、必要な子どもに支援が届くための関係作りに努めた。通える場所などの団体から発表も依頼した。管内の関係機関に報告冊子を郵送し、管内の資源紹介の役も担った。</p>			<p>【訪問活動】【学習支援】月に2回×7名（北見市とオホーツク管内）という目標に対し、訪問と学習で12名が利用し、訪問60回・学習77回という達成状況となった。特に、学習支援は、本人の希望のあった時という設定であったが、5名の利用があり、内容も英語・数学といった学校の教科のみならず、ジョギングなど体力づくりもあり、それによって通信制高校へ進むきっかけとなった例もあった。</p> <p>【保護者相談】当初あまり想定していなかったが、直接子どもと会えない場合も、保護者の話を聴かせてもらうことで訪問するうちに、また本人と会えた例もあった。</p> <p>【フリースクールなど見学】希望のあった時という設定であったが、3人がフリースクールなどへ進み、4人が学校復帰した。</p> <p>【基盤強化/関係機関交流会など】北見市で関係機関交流会を実施し、学校関係者など35名の参加があった。当活動含め、6団体の活動発表を実施し市内の資源を知ってもらう機会となった。管内でも実施予定であったが達成できず、代わりに事例紹介などを含めた同じような内容の冊子を作成し、管内の全小中高校や教育委員会をはじめ公的機関、関係団体などへ発送した。</p>					
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）					
<ul style="list-style-type: none"> <li>●初めて訪問する前に、本人の好きなことや好きな話題、苦手な人やことなど、家族や繋いでくれた関係者から聞き、準備をすることの大事さを教えられた。初対面の日に、本人とどんな時間を過ごすかで、その後の関係に影響する。</li> <li>●現在、家に籠っている子どもでも、本人の中に状況を変える力があると信じる。無理に大人の望む道に動かそうとしなくても、本人が楽しいと感じる時間を他者と一緒に過ごすことや、勉強がわかり自信をつけることで、家から出て前へ進んでいける例に触れ、焦らずあきらめずに伴走する大事さを教えられた。現在困っている保護者に伝えられる。</li> <li>●子ども本人の助けになると思い、ひきこもりがちな若者を紹介した例では、逆に若者にとっても救いになり、サポートする側とされる側は入れ替わりもするようなエンパワメントな関係であるということを知り、今後の支援に活かせる。</li> <li>●関係機関との繋がりを強化でき、お互いの活動を知り、どんな時に相談できるのかを認識できた。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>●この期間に出会えた該当者はまだ少なく、もっと多くの孤立した子どもがいるはず。2022年度末、オホーツク管内不登校の小学生183人、北見市84人、中学生418人、北見市197人という数が出ている。フリースクールや教育支援センターに通っている子どもの数は、そのうちの一握りであるという現状（関係機関交流会で連携した機関や団体による）は、学校の代わりに通えている場所のない子どもはまだ多いということを表している。また多くの保護者が稼働しているため、日中ひとりで過ごす子どもも多いと思われる。</li> <li>せっかく、フリースクールや夜間中学など学校に代わって通える場所ができて、そこへ行くまでの丁寧な橋渡しは今後も課題ではないかと考える。</li> <li>子ども自身に、自分の合った場所で自分の道を進む力があることはわかった上で、それをサポートするおとなたちが、気づく役・繋ぐ役・繋がる先で受け入れる役などをしっかりこなすことで、孤立する子どもが減っていく社会を作っていく希望があるのではないかと考える。</li> </ul>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>孤立した子どもをエンパワメントし、社会とつながるサポートを地域に生み出すこと</p>	<p>を達成しました。</p>
			■ 受益者の具体的な変化（自由記入）					
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・家で過ごすだけだったのが、フリースクールへ行けるようになった。</li> <li>・通信制高校へ入学することに決めた。</li> <li>・勉強がわかるようになり、再び登校するようになった。</li> <li>・他者との関りに慣れて、子どもの集まりに参加できた。</li> </ul>					